十期生

私のハンドボール歴

中江　義雄

私のハンド・ボール歴をふりかえってみると、「本当によくまあ、あきずに七年間もの長い年月ハンドボールに没頭したもの」と自分自身恐ろしく思われるのである。即ちその七年間という長い年月をハンドボールにお世話になった事によって他の人々と比較して何か今後社会生活を行っていしかく上に於て、対等に生活をもするとは送ることが出来ないのではなかろうか、と思うこと。しかし私は反対にハンドボールにたずさわった事によりドボールを社会生活を送る上に大切なる最も強い責任感・豊かな協調性の確立・強尽な体力を身につけたと信じている。今後も一社会人となる運命にある我身をこのかけがえのない体験をもって立派に送らせたく思っています。

さて、私の高津での三年間へ実際には二年間かもしれないが）のハンドボール生活は今思うと少し物足りないものでありました。即ち、もう少し練習に打ち込んでいたら、今現在まで高津ハンドボール部が達成することの出来なかったインターハイ・国体出場を成し遂げていたように思う。十数人の部員は試合前の数日間の練習のみで事足りるように考えていた。何か趣味的な、いわゆるお遊び練習であった。全く口惜しいことをしたものである。後輩の皆様はこのような失敗を起すことなく、一度先輩の悲願のインターハイの出場权を獲得してほしい。

このような事情から、大学に入ってからもハンドボールを続けている。今この原稿を書いている時は、現在リーグ戦の四日目を終ったばかりです。次の週は難敵関学で帰って来て書いています。我々高津の先輩が悲願としているインターハイ出場と同様、私の属する同志社の先輩も、関学を窮地まで追いつめながら秋のリーグには一度も勝っていない。しかし今年こそは自分の最後のハンドボール生活を飾るために優勝したく思っている。

今まで大方の大試合には自慢ではないが出場した。しかし一つこの学生王座には出場をしていない。その原因は〝伝統〟という壁を破ることが出来ない敵である。し

かし、必ず今年こそ下級生を引っぱって、その伝統の力を打ち破ることが出来ると信じている。

【土期生】

現役の時をふりかえる

石崎 寿夫

高校卒業から、はや三年目となりました。正確に言えば三年生の三分の二はハンドボールとは縁を切っておりましたから、その方で数えると三年はたっぷりすぎています。今も学生生活を続けている関係か、特に自分に変化があったとも感じることなく、勿論、人間的に成長を遂げたなどとは毛頭申されず、どうしても高校生活の延長といった気分で日々を過しています。ハンドボールも大学に入って又始めましたし、生活に特別な変化もなかったものですから、高校ハンドボール部時代をなつかしむこともあります。けれども、今、当時をふりかえって、部員連中のことなど思いおこすとき、先輩のことなど、その他試合のこと、又、きれぎれの記憶、そこうとしても、のムードといったものだけがうかんで来るにすぎず、ほんの三年が僕にとっては長い年月であったと、つくづく感じられます。人間は苦しい思い出は忘れるか、又は美化されて記憶にとどめられると言いますが、一年生当時、嫌でたまらなかった練習の苦しさ、さぼった時のうれしさ、二年生になりキャプテンになった時からは、部員が主として勉強との両立問題で、悩み、あるいは退部したりするのをまとめていく、いわばマネージメント的苦労も、今となっては、遠足の思い出と変るところありません。生来、個人的、非外交的、悪く言えば、利己的な僕がキャプテンの任務をつとめあせたのも、谷口君を初めとする同学年の連中をはじめ、先輩諸兄、下級生の援助があればこそでした。

谷口君と僕とは中学時代の同級生でし、クラブに加入したのも彼にひきづられてついうかふらと入ったのですし、夏期合宿前に心臓病気を患い、キーパーの重任を僕に背負わせたのも彼です。その他、中学時代の顔役たる彼は後に、下級生の有能なる連中を大量にスカウトし、ハンドボール部隆盛の礎を築きましたし、その功績は大なるものがあります。その後、高畑、浅野、中西、倉橋といった連中が続々入部したのですが、そのうち、高畑、浅野がやめ、中西はその後副主将の任につき、現在は早稲田大学に進学し、倉橋は歯科大一大阪に進学しました。以上の連中が第一期の